文化財
防火デー
日野八坂神社と
牛頭天王

文化財
防火デー
日野八坂神社と
牛頭天王

目次

日野・八坂神社

鳥居と本殿に掲げられている「八坂社」の篇額は、明治7年（1874）、佐藤俊正（彦五郎）の願いによって有栖川宮二品熾仁親王が特に書かれたものを飜刻したものです。

天然理心流奉納額

天然理心流の創始は寛政元年（1789）ころと推定されています。

創始者の近藤内蔵之助長碑裕は長江（静岡県）の人でしたが、二代目三助は戸吹（現八王子）、三代目周助は小山（現町田）、四代目勇が石原（現調布）と多摩地域と縁が深く、名主や豪農、八王子千人同心を中心に農民の間でも習われていました。

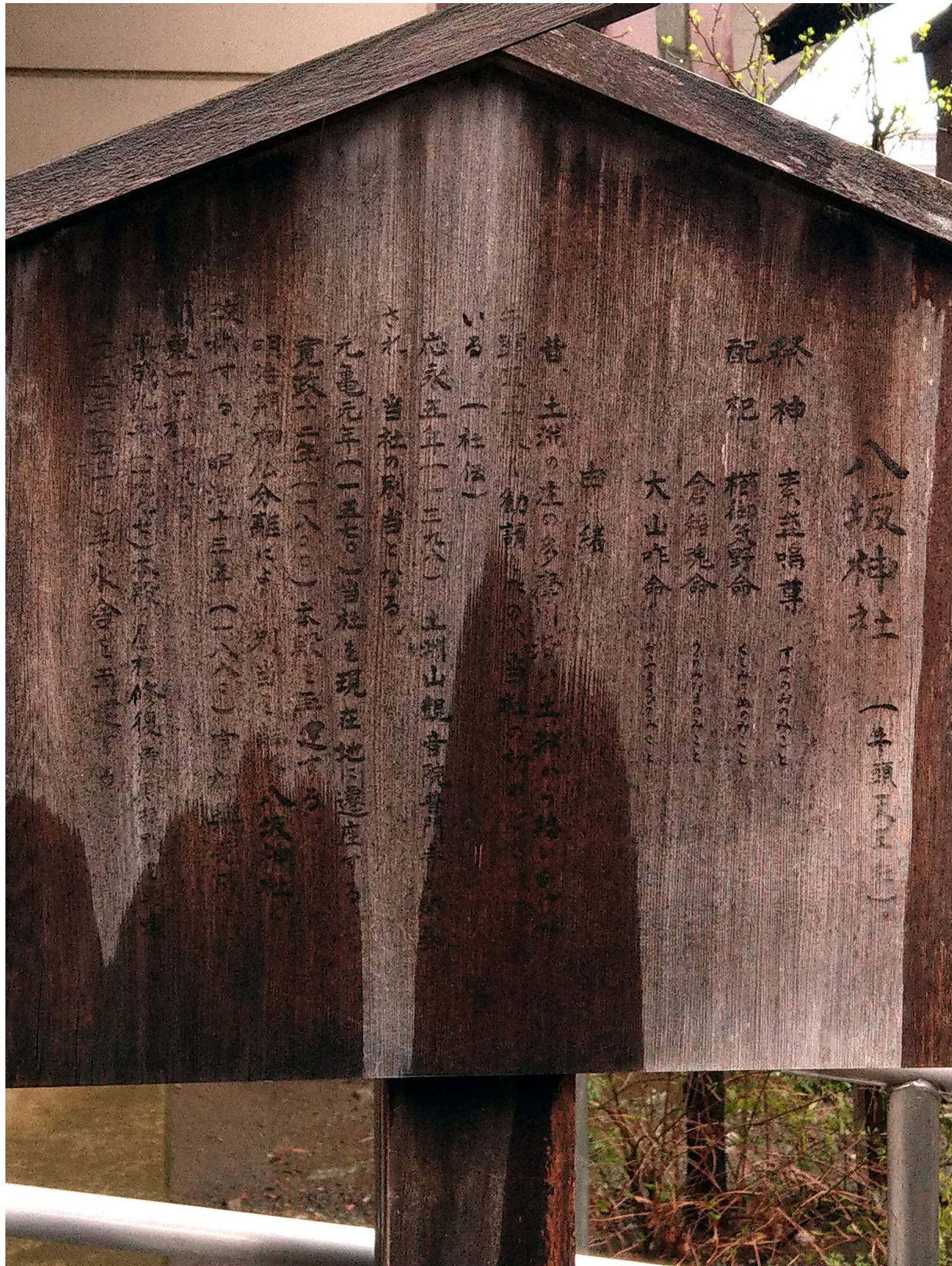
天然理心流奉納額

安政5年（1858）に奉献された剣術額には日野宿の剣士たち23名と近藤（嶋崎）勇、客分として沖田（惣次郎）総司の名が連ねてあります。

主祭神は素戔嗚尊（すさのおのみこと）か牛頭天王か

主祭神は素戔嗚尊（すさのおのみこと）とですが、元々は牛頭天王を祀る祇園社。明治の神仏分離で**牛頭天王と習合**していた素戔嗚尊を祀る八坂神社に改名。今日と祇園の八坂神社も同じです。

牛頭天王はインドの釈迦の生誕地に因む祇園精舎（ぎおんしょうじゃ）の守護神です。神道で祇園の神といえば素戔嗚尊、八坂神社に改名されるまでは「祇園社」の篇額が掲げられていましたから、「八坂」と称されることになったのは無理なく決まったことだったと思われます。ちなみに佐藤彦五郎が万延元年（１８６０）に奉納した「祇園社」の篇額も残されています。

八坂神社（牛頭天王社）
祭神　素盞嗚尊　すさのおのみこと
配祀　櫛御気野命　くしみけぬのみこと
倉稲魂命　うかのみたまのみこと
大山咋命　おおやまくいのみこと
由緒
応永五年（一三九八）
当社の別当となる
元亀元年（一五七〇）当社を現在地に遷座する
寛政十二年（一八〇〇）本殿を再建する
明治初期神仏分離により
八坂神社

牛頭天王

日本における神仏習合の神。釈迦の生誕地に因む祇園精舎の守護神とされた。蘇民将来説話の武塔天神と同一視され薬師如来の垂迹であるとともにスサノオの本地ともされた。京都東山祇園や播磨国広峰山に鎮座して祇園信仰の神（祇園神）ともされ現在の八坂神社にあたる感神院祇園社から勧請されて全国の祇園社、天王社で祀られた。また陰陽道では天道神と同一視された。道教的色彩の強い神だが、中国の文献には見られない。

祇園大明神

牛頭天王と素戔嗚尊の習合神である祇園大明神（仏像図彙 1783年）
図はWikipediaより

牛頭天王は、京都の感神院祇園社（現八坂神社）の祭神である。

『祇園牛頭天王御縁起』によれば、本地仏は東方浄瑠璃世界（東方の浄土）の教主薬師如来であるが、かれは12の大願を発し、須彌山中腹にある「豊饒国」（日本のことか）の武答天王の一人息子として垂迹し、姿をあらわした。

太子は、7歳にして身長が7尺5寸あり、3尺の牛の頭をもち、また、3尺の赤い角もあった。太子は王位を継承して牛頭天王を名乗るが、后を迎えようとするものの、その姿形の怖ろしさのために近寄ろうとする女人さえいない。牛頭天王は酒びたりの毎日を送るようになった。

3人の公卿が天王の気持ちを慰安しようと山野に狩りに連れ出すが、

そのとき一羽の鳩があらわれた。山鳩は人間のことばを話すことができ、大海に住む沙掲羅龍王（八大龍王）の娘のもとへ案内すると言う。牛頭天王は娘を娶りに出かける。

旅の途次、長者である弟の古單將來に宿所を求めたが、慳貪な古単（古端、巨端）はこれを断った。それに対し、貧乏な兄の蘇民將來は歓待して宿を貸し、粟飯を振舞った。蘇民の親切に感じ入った牛頭天王は、願いごとがすべてかなう牛玉を蘇民に授け、のちに蘇民は富貴の人となった。

龍宮へ赴いた牛頭天王は、沙掲羅の三女の頗梨采女を娶り、8年をそこで過ごす間に七男一女の王子（八王子）をもうけた。豊饒国への帰

路、牛頭天王は八万四千の眷属を差向け、古単への復讐を図った。古端は千人もの僧を集め、大般若経を七日七晩にわたって読誦させたが、法師のひとりが居眠りしたために失敗し、古単の眷属五千余はことごとく蹴り殺されたという。この殺戮のなかで、牛頭天王は古単の妻だけを蘇民将来の娘であるために助命して、「茅の輪をつくって、赤絹の房を下げ、『蘇民将来之子孫なり』との護符を付ければ、末代までも災難を逃れることができる」と除災の法を教示した。

ウィキペディアより引用

謎の多い神様

　というわけで牛頭天王とは「インドの釈迦の生誕地に因む祇園精舎の守護神」というのが最も簡潔な説明である。しかしインド、中国、朝鮮半島で信仰された形跡がない日本独自の神様でありながらも古来の日本神道の神様でもなく仏教、道教色も強い神様と、なんとも謎だらけの神様である。

　謎だらけといっても「祇園精舎の守護神」ですので、祇園祭の主役。となれば旧・祇園社、現在の京都八坂神社（日野八坂神社と区別するために京都八坂神社と書いているが、通常、八坂神社と言った場合には京都の八坂神社を指す）の「御由緒」をみればある程度はわかるはず、と思い、京都八坂神社の公式サイトを見てみると…

諸説ありますが「斉明天皇２年（６５６）に高麗より来朝した使節の伊利之が新羅国の牛頭山に座した素戔嗚尊を山城国愛宕郡八坂郷の地に奉斎」「貞観18年（８７６）南都の僧円如が建立、堂に薬師千手等の像を奉安、その年６月14日に天神（祇園神）が東山の麓、祇園林に垂跡したことに始まる」などと言われています。いずれにしても慶応４年（１８６８）の神祇官達により八坂神社と改称するまで感神院または祇園社と称されていたということです。（京都八坂神社の創祀）

八坂神社の創祀では、最初からスサノオを祀っていたようにも読める。これがわかりにくさを助長していて、どうやら八坂神社では牛頭天王の存在を正史から完全に抹消している。明治の神仏分離（廃仏毀釈）の中で、権現および牛頭天王を祀ることは禁じられ、祇園社から八坂神社と改名する

中で、牛頭天王なんてものはいなかったのだ、それはスサノオの別の姿だったのだ、我々は正しい名前で呼んでいるだけであり、みなさんが牛頭天王と呼んでいるものはスサノオのことであり存在を抹殺したわけではない、という理屈だと推察されるのであるが…

八坂神社

京都・祇園にある八坂神社。

日野八坂神社と牛頭天王

発行日　２０２１年６月10日
著者　小池利明
＊本書は(株)ボイジャーのRomancerで作成されました。